

---

# キラ ~輝けるもの~

咲妃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キラ　　〜輝けるもの〜

### 【Nコード】

N4329D

### 【作者名】

咲妃

### 【あらすじ】

『ねえ、どうして人は死んでしまうの？』　　幼い頃、キラは祖母に尋ねたことがあった。だが、今のキラにとってそんなことはどうでもいい。最愛の妹を、内乱により失ったキラはあることを誓う。魔導士にとって最大の禁忌といわれている蘇生術　　それをもって、妹を生き返らすと。

## 序章（前書き）

はじめまして、咲妃と申します。

頑張って連載しているころと思いますので、『キラ　く輝けるもの』をよろしくお願いします。

## 序章

「ねえ、どうして人は死んじゃうの？」

それは、まだ幼い頃のこと…………。

早くに両親を亡くし、自分たちを育ててくれた祖母の膝の上で、何気なく問いかけたことがあった。

横では、妹がスヤスヤと気持ちよさそうに寝息をたてている。

「っ！」

自分の問いかけに、祖母は驚いたようだった。

髪をやさしくなでてくれていたその手も止まる。

「おばあちゃん？」

だがその頃の自分は、祖母がどうして驚いているのかわからなかった。

そのぐらい、自分は何も知らない幼い子供だったのだ。

「どうか、したの？」

上を見上げてみれば、祖母がわずかに目を見開き、固まっていた。

そのことがとても不思議に思えて、自分は祖母の膝の上で首を傾げた。

祖母は、その声にハツとしたようだった。

だが次の瞬間には、いつものやさしい祖母に戻って、その顔をくしゃくしゃにする。

「うっん、何でもないよ」

自分の髪をなでてくれながら、目尻のしわをさらに深くする祖母。

その顔は笑っているようにも、泣いているようにも見えた。

「どうして、人が死んでしまうのか。きっと、それはねえ…………」

祖母は、どこか遠くを見るような眼差しをして、自分に囁きかけたのだ。

しかし今はもう、祖母が何とこたえたのか覚えていない。  
そしてそれは今の自分にとって、さほど重要なことではなかった。

この世界には、魔導士とよばれる者たちが数多く存在している。  
彼らは分野を問わず、あらゆる面で多大な影響を及ぼしていた。  
魔導士とは、今やなくてはならない存在なのだ。

しかしその裏で、魔術をよからぬことに使う輩が少なからず存在  
することも、また事実なのである。

そういった者は、あとをたたない。

そのため、魔導士には厳しい掟が定められていた。

それらの項目は、三十項目以上に及ぶという。

## 第一条

一度死した者の其の魂を現世によび戻すこと、如何なる理由をも  
つてしても、これをここに禁ず。

これ即ち、最大の禁忌なり。

## 第一話 命令

「どうして俺が、行かなければいけないんですか。納得いきません！」

昼下がりの城内　その一角から、青年の批難の声が聞こえてきた。

目をつり上げ、怒るその青年の名はキラ・ファウスト。

十四歳という異例の若さで、史上最年少、トップの成績で合格した国家魔導士だ。

十九歳になつた今では、その若さで兵部省の副官を務めている。

これは、異例の昇進だ。故にキラは、若手随一の出世頭といわれていた。

「そう怒るな、キラ。お前の髪が怒りによって、いつにも増して赤く見えるぞ」

「気のせいです」

キラは直属の上司であり、兵部省の長官でもあるハクをその鋭い眼差しでにらみつける。

確かに、それはハクの気のせいだっただろう。

元々キラの髪は燃えるような、鮮やかなまでの真紅。

くすんだ銀色の瞳は、見る者を萎縮させるだけの力があつた。

ただ無言でにらみつけてくるキラを見て、ハクが思わずといったようにため息をつく。

(とりつく島もないというのはこういうことか)

そんな上官を、無表情で見つめるキラ。

自分が反対するであろうということは、ハクにだってある程度予想できていたはずなのだ。

「仕方がないだろう、上の命令なんだから」

ハクが、困りきった顔でこたえる。

そのハクもキラほどではないにしろ、位から考えればやはり若い。

しかし、それについて異論を唱える者は、だれひとりとしていない。

ハクの有能さは、だれの目から見ても明らかだったからだ。

キラも、ハクの有能さだけは認めている。

「キラ、仕事はちゃんとやりなさい。それが、我々の義務というものだ」

己の言葉にひとしきりうなずく長官を、キラは冷ややかに見つめた。

「その言葉、あなただけには言われたくありません」

キラはあえて、『だけ』を強調するように、声を大きくする。

しかし、ハクのほうはいつこうにこたえた様子もない。

それどころか、飄々（ひょうひょう）と嘯（うそ）いてみせた。

「そうか？」

「はい」

部屋を見回したキラは、思わず顔をしかめた。

部屋の中は、山のようにたまった書類で散乱していたのだ。

それは、キラの腰よりも少し下ぐらいの高さまである。

馬鹿らしくもキラは、ここまで来るのに、書類をかきわけてきたのだ。

兵部省の長官、ハクは仕事をよくためることで有名である。

そのたび苦勞するのは、副官であるキラや部下たちなのだ。

だが当の本人は、そのたびに上手く逃げて、実質的被害は受けていなかったりする。

「つて、そうじゃなくてですね！」

「ん、何だ？ キラ」

笑顔でとぼける長官に、キラはこめかみに青筋をうかべた。

「何で、俺が、行かなければいけないんですかっ！」

「どこにだ？」

「戦争に、です」

キラは、間髪いれずにこたえる。

そう、キラが怒っている理由はこれだ。

「だって……命令なんだもん」

ハクは、拗ねた子供のように唇をとがらす。

キラのこめかみに、再び青筋がうかんだ。

(いくつだ、あんたはっ！)

キラは時々、この人の下にいることにもの凄く疑問を感じることもある。

しかし、今の問題はそこではない。

「俺は、あなたの副官なんです！」

「そうだよ。つまり、兵部省の副官でもあるということだ」

「確かに、そうですね……」

穏やかだが鋭いきり返しに、キラは思わず反論の言葉を呑みこんだ。

強く、唇をかみしめる。

兵部省は、軍部を司る部署なのだ。

そのせいもあってか、兵部省には多くの魔導士が在籍している。

長官であるハクも、その副官であるキラも魔導士だ。

だが、キラたちはあくまでも政に携わる者であって、軍部の者ではない。

たまに手伝いとして兵部省の者が引き抜かれることはあっても、副官が行くというのは未だ聞いたことがない。

だから、キラが怒るのも、また道理なのだ。

「……それほどまでに、戦況はおもわしくないのですか？」

決して傲っているわけではない。

しかし、己の実力ぐらいは把握しているつもりだ。

前代未聞だろうと何だろうと、やろうというのだから、それぐらい戦況が悪いということだろう。

「ああ、そのようだな」

背もたれに体を預けながら、ハクが思案顔でうなずく。

常々キラは、いつもこんな顔をしていればいいのと思う。



「どうも、こちらに部が悪いらしい」

「負ける、かもしれないということですか？」

「そういうことになるかもしれない、ということだ」

キラの直球の問いかけに、ハクは動揺した様子もなく、あっさりと首肯した。

「そのうえ戦場の様子すら、こちらはいまいち把握しきれていないというのが現状だ」

何よりも雄弁なハクのその瞳が、キラも知っているだろうと、言外に告げてくる。

それにキラは、露骨にいやな顔をしてみせた。

「それで考えて、朝廷からだれかを引き抜くことにした。それが、俺だと？」

「そうみたいだね」

ハクが、いかにも気の抜けた声でうなづく。

キラの人を萎縮させるような鋭い眼差しも、ハクには通用しない。「信頼されている、ということだろう」

「むしろ俺には、ていのいい左遷に思えるんですけど」

キラは、いつになく低い声で返す。

どこをどうすれば、信頼されると捉えることが出来るのだろうか。

「何事も勉強だよ、キラ」

笑顔で言う長官を前に、キラは戦争に行くことの何か勉強だ、という言葉を寸前で呑みこんだ。

所詮、何を言っても無駄なのだ。

柳に風。

何を言っただって、ハクには上手くかわされてしまっ。

結局、是<sup>ぜ</sup>とうなづくしかなかった。

ハクの口に勝てるはずもなければ、命令に逆らうことも出来ない。キラもそれは、はじめからわかっていたことだ。

それでも、反論せずにはいられなかった。

キラは一度大きく息を吸うと、目の前に座る長官を、その強い眼差しで見据える。

「わかりました」

たった一言。

そう告げると、身を翻す。

「キラ」

ハクがよびとめてくる。

「早く戻ってこい」

振り返ることなく、キラは長官の言葉に耳を傾けた。

柄にもなくジーンとしてしまう。

だが、やはりハクは一言多かった。

「じゃないと、いつになっても仕事が片付かないからね」

「あなたがやらないからでしょう。失礼しましたっ！」

怒りもあらわにドアを開けると、そのままの勢いで、ドアを閉め出て行く。

その拍子に近くにあった書類の山が、音をたてて崩れてしまった。

第二話 妹 【前編】（前書き）

キラの過去が明らかになります。

## 第二話 妹 【前編】

ハクは思わず肩をすくめると、キラが出ていった扉を凝視する。  
「やれやれ、だな」

キラは、戦争そのものを嫌っている節がある。  
憎んでいるといったほうが、正しいかもしれない。

その理由も、ハクは知っていた。  
それでも、ハクにはどうすることも出来ないのだ。

「何事も勉強、か……」

ハクは、己が言った言葉をもう一度口の中で反芻してみた。  
自分で言っておきながら、あまりにもバカバカしく思えて、嗤い  
すらこみあげてくる。

「しかし、あの性格さえ直せば、文句なしに有能なだけだね。ん  
？」

ちよつと待て、とハクはそこで考え込む。

その口端が、わずかにつり上がった。

「まあ、あの性格が直ってしまったら、逆にからかいがなくな  
つまらないか」

それこそ、キラの前で言ったら怒られそうだと、頭の隅で思いな  
がら、ポツリとつぶやいた。

その頃 ……

長官に本人あずかり知らぬところで、性格さえ直せば有能と評価  
を受けた副官は、猛然と廊下を突き進んでいた。

他にはだれもない。

それをいいことに、時々ぶつぶつと文句をつぶやく。

「何が、何事も勉強だつ。戦争から何を学べって言うんだつ！」

それは、ハクには言えないこと。  
朝廷に出仕する者の前でも、だ。

キラの足が、ふいにピタリと止まる。

そのまま壁に背中を預けると、空を見上げた。

雲間から差し込む日の光。

嫌味なくらい、澄みきった青空が広がっている。

キラは、思わず目を細めた。

「俺は、戦争なんか大嫌いだ……っ！」

その声、その表情には、苦いものが混じっている。

戦争をすることに、何の意味があるのだろうかと思う。

大勢の人間がただ死ぬだけだ。

それでも戦争がしたいというのなら、やりたい奴らだけでやってい  
ればいい。

それでは、いけないのだろうか。

朝廷に組する者として、絶対に思っではいけないことを、キラは  
どうしても思ってしまう。

戦争は、キラから大切なものを奪っていったのだ。

行きたい、と思うはずがない。

目を閉じれば、四年前のあの日の悪夢が、昨日のことのようによ  
みがえってくる。

あの日も、いつもと同じように終わるはずだったのだ。

あんなことさえ、起きなければ……。

耳を澄ませば、妹の明るい声が聞こえてくる……。

「お兄ちゃん、早く起きて。遅刻しちゃうよー！」

「う……ん。わかってる。今起きる」

キラは寝返りをうちながら、いつものように言葉を返したのだ。

その頃のキラは、朝廷に出仕するようになって、ようやく一年。

仕事にも、どうにか慣れてきた頃のことだった。

「おはよう、お兄ちゃん」

まだ眠い目をこすりながら下におりていくと、妹のサラが笑顔で声をかけてくる。

「おはよう」

キラはいつものように挨拶を交わすと、顔を洗いに洗面所へと向かった。

朝の弱いキラは、そこでようやく目が覚めるのだ。

そのあと食事をする部屋に行くと、すでに朝食は出来上がっていた。

サラが顔をしかめて待っている。

「お兄ちゃんが早く起きてこないから」

「悪かったよ。今度からは気をつける」

キラはおきまりになってしまった言葉を口へのぼらせながら、いすに座る。

サラも、キラの真向かいに座った。

「今度から気をつけるって言って、いつも守らないくせに」

「仕方ないだろう。俺だって疲れてるんだよ。だいたいそんなこと言うなら、先に食べていればよかっただろう」

「ふたりに食べることに、意味があるんでしょう。ひとりで食べたって、味気ないじゃない」

サラは唇をとがらすと、拗ねたようにその銀色の瞳でキラをにらみつける。

キラはその様子に笑みをにじませると、胸の前で行儀よく手を合わせた。

サラもそれにならう。

「いただきます」

「いただきます」

これが、朝のいつもの光景だ。

家には、キラとサラのふたりしかない。

キラたちの両親は、ものごころつく前に亡くなってしまっている。そんなキラたちを育てくれたのは、母方の祖母だった。

その祖母も数年前に亡くなり、今はふたりで暮らしている。肉親といえるのも、今はサラだけだ。

だからよけいに、妹には甘くなってしまうのだろうか。

キラには、その自覚があった。

「お兄ちゃん、今日も遅いの？」

パンをかじりながら、サラが尋ねてくる。

その表情は、心なしどこかうかない。

「ああ、たぶんな」

自然と、キラの声に苦いものが混じる。

こここのところ、キラの帰りが遅い。

そのもつともたる要因は、内乱が続いているからだ。

いくらまだ下つ端とはいえ、国の大事な時、しなければいけないことは山のようにたまっていった。

「そっか……」

肩を落とし、しゅんとうなだれるサラ。

その姿は、捨て犬をキラに連想させた。

キラは、思わず笑みをこぼし。

それをどうにかかみ殺すと、手をのばした。

そのまま軽く、サラの赤茶のくせの強い髪をなでてやる。

サラは、されるがままになっていた。

「ごめんな。夕食は、ひとりで食べてくれ」

「うん、わかった」

サラは、気丈にも微笑んでみせる。

それでもやはり、だれもない家でひとりで過ごすのは、寂しいのだろう。

「本当にごめんな」

「仕方ないよ。まだ、内乱が続いているんだし……」

サラのその声にはいつものような覇気はなく、弱々しく感じられ

た。

その様子を、キラはただ静かに見守る。

サラは、戦争や内乱が嫌いなのだ。

それは、キラとてももちろん同じだ。

「大丈夫だ」

力強い、それはキラの声。

サラが、ハツとしたように顔を上げる。

「大丈夫だ」

「お兄ちゃん……」

サラの顔に、安堵がうかぶ。

だが、次のキラの発言にすぐに頬をふくらませた。

「朝廷側が、負けることはないだろうから」

「それも重要だけど。けど、そういうことじゃない」

キラには、サラが何を言いたいのかわかっていた。

しかし、ついついからかいたくなってしまうのだ。

「あたし、戦争は嫌い。長引けば、それだけ苦しむ人が増える。あ

たしは、それがいやなの」

さすがのキラも、それには神妙な面持ちで耳を傾ける。

人が死ぬのは、見たくない。

それは、だれしも同じはずなのだと思う。

しかし愚かだ、反対だと声高に叫びつつも、いつの世にも戦争は

存在する。

何故なのだろうと、キラは時々考えることがある。

「命つて、とても想いものなはずなのに、どうして簡単に斬り捨て

ることが出来るんだろう。それも、同じ国の人同士が」

「そうだな」

戦争。

考えるだけでも、心が暗く沈む言葉だ。

こんな内乱、早く終わればいいのに。

そう思いながら、パンを口に放りこんだ。



そして、そのまま立ち上がる。

いい加減、そろそろ家を出なければいけない時間だ。

「もう行くの？」

「ああ。さすがに遅刻するわけにはいかないからな。ごちそうさま」

「そっか、そうだよね」

サラが一瞬目をふせた。

しかっかりしているようで、実は寂しがりやなのだ。

そんなサラがキラには愛しくもあり、大切だと思う。

「いい子に留守番してんだぞ」

わざわざ外まで見送りに出てきてくれたサラを、キラはちゅかす。

予想通りサラは頬をふくらまし、キラを睨みつける。

「もうっ、またそうやって子供扱いするんだから！」

腰に手をあてて自分を見上げるサラに、キラは思わず苦笑をこぼした。

その仕草が、子供扱いされる要因のひとつだと、サラは気づいていないのだろうか。

「大丈夫だよ」

そんなサラをなだめるように、キラは穏やかな口調で囁きかける。

サラが、ハッと息を呑んだのがわかった。

「大丈夫だよ、この町は。それに俺も」

わざとちゅかすように言うと、サラが目を眇める。

おそらく、サラが一番不安に思っているのは、このことだろう。

まだ下っ端の魔導士が、戦争にかり出されることは稀にあることなのだ。

「もう、だからそういうことじゃないんだって」

怒っているように見せて、内心では違うことを思っているのも、キラは知っている。

その証拠に、次の瞬間には笑顔にかわっていた。

「でも、ありがと。お兄ちゃん」

「ああ。行ってきます」

「うん、行ってらっしゃい。気をつけてね」  
「ああ」

いつものように、キラは軽く手を振り返し、朝廷へと向かった。

今日という日が、いつもとかわらず終わるものだど、この時ふたりは当たり前のように信じていたのだ。

「だれが予想し得ただろうか。」

あんな悲劇が起こるなんて ……。

### 第三話 妹 【後編】

「大変だっ、キラ！」

日が傾きはじめた頃。

書庫で書類の作成をしていたキラの元に、同僚が息をきらして駆け込んできた。

「どうしたんだ、いったい……」

そのただならぬ様子に、キラは顔をしかめる。

いつも落ち着いている同僚の、そんなにあわてた様子を、キラははじめて見た。

「お前の住んでいる町、今大変なことになっているらしいぞ」

「どういうことだ？」

同僚の不穏な言葉に、キラの心臓がドクンツと激しく跳ね上がる。いやな予感がした。

何故だか、聞きたくないと思う。

「お前の街、反乱軍の生き残りの通り道だったらしくて……焼き討ちにあつたらしい」

その言葉に、キラは文字通り凍り付いた。

「何だつて……っ！」

キラは、半ば無意識のうちにつぶやいていた。

朝、笑顔で見送ってくれたサラの姿が脳裏にうかぶ。

「おい、キラっ！」

気がついた時には、走り出していた。

うしろで同僚のよび止める声がある。

しかし今は、そんなことにかまっていられない。

退出の許可を得ず、無断で朝廷を飛び出す。

サラが無事なのかどうかそればかりが気がかりで、他のことが頭から抜け落ちていた。

息をきらし、ようやく町にたどり着いた時には、そこは惨状と化していた。

思わず立ちすくんでしまったぐらいだ。

何件もの家が炎に包まれ、日が落ちはじめた町を赤々と照らしている。

地面が、血で赤く染まっていた。

未だに悲鳴や、泣き叫ぶ声がこだましている。

キラの喉が大きく上下する。

冷や汗が、どつとあふれた。

視線の先では、人が倒れていた。

しかも、あきらかに息をしていない。

その横では、幼い子供が亡骸に縋りつき泣いていた。

気が狂ったように、嗤いだす者もいる。

そこに朝見た穏やかな姿は、欠片もない。

まるで、別世界に放り込まれてしまったかのようだ。

そのぐらい、その光景は日常からかけ離れていた。

キラは胸を焦がす焦燥を無視し、その中を必死に駆ける。

サラの安否が気にかかった。

「サラ！」

勢いよくドアを開けると、軋む音がした。

幸いというべきなのだろう。

キラの家は、燃やされてはいなかった。

だが、目の前に広がった光景はあまりにも残酷で。

キラは、言葉を失った。

視界に映しだされたのは、朝とはまるで正反対の光景。

物という物が壊され、至るところにその破片が散らばっている。

ここで何が起こったのか、目にうかぶようだった。

窓ガラスも無惨に割られ、光に反射し、不自然なまでにキラキラと輝いていた。

そんな中、床の一角を染めた赤が一際目をひく。その中央で、力なく横たわる姿も。

「サラ……！」

ふらふらと、おぼつかない足取りで駆け寄る。

まるで、宙に浮いているかのように平行感覚がなかった。

「サラ……！」

その単語以外は知らないかのように名をよび、抱き起こす。

キラの手が見る間に赤く染まった。

それは、唯一血をわけた妹のもので……。

「何で、お前が……！」

すでに息をしていないのは、明白だった。

だが、心がそれを否定する。

「起きろよっ、サラ！」

信じたくなかった。

信じられなかった。

しかしもう動くことのない冷たい体を抱きしめっていると、否応なしにその現実をつきつけられる。

お兄ちゃん

気をつけてね！

耳によみがえるサラの声。

だがもう、直接聞くことは叶わない。

「目を開けてくれよ、サラ……っ！」

きつと怖かっただろう。

痛かっただろう。

助けてやりたかった。

守ってやりたかった。

けれど、その想いが音として口から発せられることはない。

そのかわり、願いを乞う。

「もう一度、お前の声でお兄ちゃんってよんでくれよ……っ！」  
覆い被さるようにして、強くサラの体を抱きしめる。  
その頬に、悲しみの涙がつつた。

キラは、閉じていた目を開ける。

あれから、四年もの月日が経ってしまったのかと思う。

それでも、胸の痛みは未だに消えない。

そして、キラはあることを心に誓った。

蘇生術でサラを生き返らす、と。

それは、魔導士にとって最大の禁忌だ。

掟で、そう定められている。

もしばれでもしたら、ただではすまない。

それでももう一度、あの声に名をよんで欲しいから。

笑いかけて欲しいから。

そのためなら、どこまで堕ちようともかまわないと思った。

しかし蘇生術は、そう簡単におこなえるようなしろものではない。

事実、キラは四年経った今でも、その方法を見つけれずにいる。

これまでも蘇生術をおこなおうとした者はいない。

しかしだれひとりとして、成功した者はいない。

最大の禁忌にして、最大の秘術、それが蘇生術なのだ。

「サラ……っ！」

その声にも、表情にも悔しさがにじんでいる。

キラは、焦っていた。

未だ成功しない蘇生術。

正確な情報がどれなのかすらわからない。

そのうえ、戦場に赴くことになってしまった。

そのあいだは、研究が出来ない。

ほんのわずかな時間ですらすらおいしいのだ。

本音は、行きたくない。

だが、もう決まってしまったことだ。  
覆すことは出来ない。

キラはそう自分に言い聞かせると、また歩き出す。  
足取りは確かなものだった。

そしてその一週間後、キラは追加部隊とともに戦地へと向かった。

窓越しにそれを見送る者がひとり。

兵部省長官、ハクだ。

だが、キラはそのことを知らない。  
知ることもないだろう。

それでいい。

知らなくとも、別にかまわないのだ。

「ちゃんと無事にここに帰ってこい、キラ」

素直ではないハクは、目の前に本人キラがいたら、そんなこと、口が  
さけても言わなかっただろう。

ハクがひとり見送る中、キラの加わる隊がどんどん遠ざかってい  
く。

今では、豆粒ほどの大きさだ。

ハクはそれを眺めながら、思わずといったように苦笑をこぼした。  
もし自分が戦地に行くことになったら、きっとキラも同じことを  
しただろう。

直接、励ましや心配していると声をかけることは、お互いにしない  
ような気がする。

そういったところが、自分たちは似ているのだ。

キラの加わる隊を見送りながら、ハクはふとそんなことを思った。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4329d/>

---

キラ ~輝けるもの~

2010年10月10日18時34分発行